

米国教育キネシオロジー財団は、2020年3月15日付で、米国ならびに全世界の財団登録インストラクターに対して、新型コロナウイルスに対する対応として講座の一旦中止や延期を推奨いたしました。しかしながら、各国により状況は大きく異なるため、当協会では、日本で活動するインストラクターに対して、日本政府と厚生労働省の指針に従い活動するように伝達しております。

対面でのインストラクター・コンサルタント活動が自粛される中、協会はオンラインでの個人セッションとグループセッションのコンサルタント活動を一時的に導入いたしました。全てのインストラクターはコンサルタントも兼ねて活動していますが、対面での活動に加えオンラインを使つてのコンサルタント活動を申請したインストラクターには、「OC: Online Consulting」の表示を協会HPにおいて掲載しています。コンサルタント活動のオンライン提供は、予告なく終了することもありますのでご了承ください。

■事務局稼働日のお知らせ

2020年4月10日現在、東京都には非常事態宣言が出されており、当面の間、事務局の稼働日を週1回水曜日とさせていただきます。ご不便をおかけいたしますがご了承ください。

■総会のお知らせ

- 日程 6月3日(水) 5時から7時まで
- 会場 当協会事務局事務所(千代田区平河町)

■2019ブレインジムデイ記録集を販売しています



■一冊 1,100円 送料 84円

【お問い合わせ】事務局 jimukyoku@edu-k.jp

●<えでゆとく>は、知っているとちょっとお得な豆知識コーナーです



反射的に動くのではなく、身体を意識して動かす

天田 武志 (神奈川)

運動主体感とは、私たちが体を動かす時「まさに自分が運動している」「運動を引き起こしている主体は自分」という感覚のことだそうです。

運動主体感は普段は意識しない感覚ですが、もしこの感覚が失われると、自分で運動しているにもかかわらず、誰か他の人に操られているような体験をする場合があるそうです。

自閉症作家の東田直樹さんは自著で「僕は、まるで壊れたロボットの中において、操縦に困っている人のようなものなのです」と表現していますが、これも運動主体感と関連しているのかもしれませんが。

今回、東京大学の研究グループは、自分の動きかどうかわからない状態から運動をスタートし、運動を進めていくに従い、どの程度自分の動きであるかが明確になってくるように設計された、巧妙な実験で運動主体感に関わる脳の領域はどこにあるのか、そしてその感覚の定量化に成功したそうです。詳しくは右記のウェブサイトをご覧ください。

「『まさに自分が運動している』という運動主体感を、脳活動情報から定量化」
<http://www.qlifepro.com/news/20200324/human-brain.html>

実験の結果、左右の運動野と左の頭頂葉、右の縁上回(下頭頂小葉という頭頂葉の一部)が運動主体感と関連している可能性が示唆されました。

特に右縁上回は、特定の時間長に選択的に応答するニューロン群が存在する可能性があるという報告もありますので、運動主体感と時間感覚の関連も興味深いところでは。

ブレインジムのエクササイズは「反射的に動くのではなく、身体を意識して動かす」というようなことをデニソン博士から10年ほど前に聞いたことがあります。意図して動かすことで、認知機能において重要な役割をしている頭頂葉に何らかの影響を及ぼしているのかもしれないね。



えでゆけ vol.29

Edu-k Journal

Spring 2020

BRAIN GYM JAPAN 季刊(年4回発行) 発行:NPO法人日本教育キネシオロジー協会 東京都千代田区平河町2-11-10 パークウエスト301 電話03-6272-6037 企画・制作:K1スタッフ

「未来のために」ブレインジムができること⑫

「スクールプロジェクトを開催してみた」

河本 知恵 (岩手)



2020年1月10日、岩手県で初めて、県立病弱支援学校(小中高)でスクールプロジェクトを開催しました。この学校は、学校看護師が常駐して、教育支援センターも兼ねており、さらに小児単科病院・児童養護施設・児童心理治療施設が隣接しています。

私は、この学校に養護教諭、学校看護師として勤務し、児童生徒たちとブレインジムをしました。

また、児童生徒の入院施設(松尾美恵インストラクターが勤務されています)では、ブレインジムを活用して、教員よりも児童生徒がブレインジムエクササイズを知っているという状況が生まれました。

すると、その児童生徒の担当教諭がブレインジムに興味を持ってくれました。そこで出版されている諸先輩方のブレインジム関連の本を使用した読書体験会や、助成金を活用してBG101講座を開催すると、定員を超える申し込みがあり、関心の高さをうかがうことができました。

総合して、今回のスクールプロジェクト

の参加者は、BG101講座を受講した群、ブレインジムを体験したことがある群、初めて体験する群と、ブレインジムの理解度の差がある状態でした。プロジェクトでは「気になる行動と3つの正中線や、動きのパターンとエクササイズの関係性」を座学と体験を通じてお伝えしました。気になる行動に対する対処講習は多種多様で、教員それぞれに得意な方法があることを知っていたのでエクササイズよりも、動きと学習についてのブレインジムの視点を優先したいと考えたからでした。

いただいた感想としては、体験の前後で変化を感じることができたという一方で、どう授業に活用すればよいか、というご意見がありました。

今回、このようなご意見をいただいたことから、実施校では、継続的な勉強会を開催することになりました。背景には校長先生、事務長が参加してくださった経緯があると感じています。協会理事(たむら理事長)が講師になっていただけたことが、参加意欲に大きく関与していると感じ

ました。体験会やフォローアップ会で参加された方から、「地元の人にも知ってほしい、でも資金はない」という相談をうけます。公立の教育現場で資金を調達するのは難しく、外部講師を受け入れるハードルは高いです。こういった状況においてプロジェクトは有効であると感じました。

また、体験中の笑い声や、興味関心・発想・洞察力は、とてもエネルギーにあふれた「統合された」状態でした。子どもの困った行動に関して対応策を持っているが上手くいかないという「統合されていない」状態から、知識の融合と創造力を生かした「統合された状態」を体験すると、また味わいたくなると私は思いますし、こういう環境なら子どもの自己肯定感や学習への興味関心を高く維持できるのではないかとワクワクしています。

最後になりましたが、開催にかかわってくださった皆様に、心より御礼申し上げます。

